

# ドナウ の 四季

## 2010年・新春号・No.5

2009日本ハンガリー友好年を終えて	瀬川 隆生	1
向日葵が結んだ縁	瀬川 知恵子	2
コンチェルト・ブダペストの誕生	角谷 聡子	3
プールの中から	長沼 敦	4
エコノミストのハンガリー回想(3)	佐藤 経明	5
私の読書日記	盛田 常夫	6
ハンガリー履歴書	板井 一政	8
	梅村 裕子	9
相馬笙子先生を偲んで	佐藤 紀子	10
留学生自己紹介	浅井友香・安田恵子・大山彩・三川桃	11
緑の丘日本語補習学校	カルドシュ ヨーージェフ・オロス ジュジャンナ	14
緑の丘日本語補習学校バザー		
スポーツ行事・運動サークル情報		15
ブダペスト日本人学校		16
運動会		17



## コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

1928年に生まれたハンガリーの経済学者コルナイの自伝。  
第二次大戦後の社会主義計画経済から現在までのライフヒストリー。

### 「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン コルナイ・ヤーノシュ自伝

— 思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】  
◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込）◆A 5 判／ISBN 4-535-55473-0 ◆日本評論社



## 体制轉換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制轉換の理論と轉換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

### 第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

### 第二部 ポスト社会主義経済

体制轉換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制轉換の違いを解明。

■新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



## なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ [著] 盛田常夫 [編訳]

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判  
■ ISBN 4-535-78331-4

## 異星人伝説

ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。なぜなのか。大きな足跡を残したハンガリー出身の科学者たちの生い立ちからその到達点までを描いた評伝。

## 体制轉換20年の歴史的・理論的総括の書

## ポスト社会主義の政治経済学

### 体制轉換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

盛田 常夫著

■ 2010年1月中旬発売 日本評論社 定価3800円

新しい概念を駆使して、体制轉換以後の中欧社会の状況を分析。  
体制轉換の社会哲学から経済システム、政治体制、社会動向、  
イデオロギーにいたるまで、社会経済の全般を捉える。



## 2009日本ハンガリー友好年を終えて

日本ハンガリー友好協会理事・事務局長 瀬川 隆生

ハンガリーに明け、ハンガリーに暮れる

2009年はハンガリーで始まり、ハンガリーで終わる日々でした。2008年に日本ハンガリー友好協会事務局長に選出され、業務を引き継ぎましたが、日々の事務局業務に加え、今年は特別な記念の年ということで、様々な記念行事に携わるようになりました。

### 記念プログラム

2009年記念フェスティバルプログラム作成担当責任者として2008年11月から本格的な準備が始まりました。印刷制作会社選定から原稿依頼等々が始まり、全国各地の友好協会の実態を調査する下準備、担当者選定、原稿依頼交渉、プログラム制作構成を話し合う理事会の開催、出来上がった原稿、デザイン、ページレイアウトの校正、配布表の作成、住所確認作業、費用の交渉、資料返却まで、時には、徹夜も珍しくない日々が続きました。

当初、2000年発行記念誌を参考に46ページ程度、3000部印刷想定で始まったプログラム作成計画でしたが、全国の関係者に原稿をお願いしたところ、年末を過ぎても全く反応がなく、どうなることかと心配になりました。

一月から個別に依頼して原稿を集めにかかり、少しずつ手応えが出始め、日本ハンガリー交流年名誉総裁秋篠宮殿下のお言葉を掲載できることが確実に became ところから、締め切り後の「最後の最後で」(やや、欧州の考え方では理解し難いと思います)印刷会社の原稿受付締め切りぎりぎり、関係者から原稿の反応が強く始まりました。結局、ページ構成を60ページに変えることになり、原稿量を抑える作業も加わってきました。

その後は、印刷会社とのやり取りが頻繁に続き、校正に次ぐ校正で、理事会、実行委員会から最終OKが出るまで多忙を極めました。

印刷に目処がついたところで、原稿投稿者等からデマンドを集めたところ、希望部数が想像以上に多数に昇り、ついに部数を10000部の発行と変更するにいたりしました。嬉しい悲鳴というところでしょうか。おかげさまで、各方面から素晴らしいプログラムになったとお褒めの言葉をいただき、プログラム作成責任者としては安堵しております。各イベント等で大いに利用され、配布されて、現在、ほとんど在庫がなくなった状態です。

全国交流の集い

9月26日、担当理事や各地の方々が開催に尽力され、今年最大のイベントの一つである「日ハ友好・全国交流の集い」が、東京都日本橋區船場のロイヤルパークホテル3階全フロアを借り切って午前10時より開催されました。日本ハンガリー友好協会が全面的にサポートし2009年日本・ハンガリー国交回復50周年記念事業委員会の記念行事ビッグイベントが様々な形で賑々しく並びました。

準備には前年から相当長い時間が使われ、支度は前夜まで続きました。ハンガリー日本全国から各種の展示があり、ハンガリーから小学生、中学生の絵や書道、ハンガリー風景写真を交えたトークショー、日本人、ハンガリー人によるハンガリー語、日本語スピーチコンテスト、ハンガリーからカラーカ民族アンサンブル演奏、ルービックキューブの日本人トップの演技(ハンガリーで行われた競技でも世界チャンピオンになりました)、日本各地の友好協会、団体等による歌や踊りの発表、茶道や華道のデモンストレーション、功労者等の表彰式、参加者の記念撮影、そして夕方からは協力企業43社を招待した懇親パーティとなりました。

企画・運営を初め、6名の運営委員、協会の関係者がすべてを取り仕切ったものでした。私も、その中の一人でしたが、敷内茶道でお客様を迎える側にも立って茶道の実演も行い、当日は一日中、多忙を極めました。このイベントには、河野洋平(前衆議院議長)会長、ポハール駐日ハンガリー大使、米倉弘昌住友化学会長、石井幹子照明デザイナーを始め、各界から約300名以上の参加をいただき、大成功に終わりました。

### エリザベート橋点灯式

前月、日本ハンガリーフェスティバルの記念行事のもう一つのビッグイベント、エリザベート橋点灯式が華やかにブダペストで行なわれるに際し、私も、式典参加のために、100名あまりの日本および各地の友好協会のメンバーに交じてブダペストを訪問しました。

11月17日夕方、船上からエリザベート橋点灯を眺めながら、式典を祝うパーティが催されました。河野洋平実行委員長、田中義具日本友好協会理事長、デムスキー・ブタペスト市長等が見守る中、午後7時頃、橋梁に両国の旗をイメージした映像が照らしだされ、橋全体が日本とハンガリーの友好の灯に

包まれました。船上から見る灯りの向こうには、王宮のシルエットが浮かび、改めて世界遺産たるブダペストの美しい夜景に見とれました。確かに、世界に誇る夜景であると確信した次第です。

その後、バラージ外務大臣主催のレセプション、駐在大使の夕食会に招かれました。以前、駐在していたころから知っていた懐かしい方々、今回新たに交流を深めさせていただいた方々とともに懐かしい大使館でのパーティを心行くまで楽しませていただき、ハンガリーに関われた光栄を思いました。

### ブダペスト再訪問をして

久しぶりのブダペスト訪問では大勢の方々と交流する機会を得ました。ハンガリー人、および駐在日本人の心の温かいふれあいは、私が駐在時に実感したものと少しも変わっていないと感じました。お互いに、言葉にしろなくとも、どこかにアジア民族としての通じるものが根っこにあると感じました。特に、ハンガリーの方は、日本が遠くにあっても、日本への親近感を口にされますし、態度でも伝わってきます。

今回私は、延べ5日、ブタペストに滞在しましたが、自由時間は、出来るだけ街を歩いてみました。あちこちに工事中、修理中の箇所があるものの、確実に広場や町並みが整備され、発展していく姿を感じました。世界をひきつける魅力的な都市であることも、改めて実感しました。暫く離れて再訪問したからこそ、の感想だったと思います。

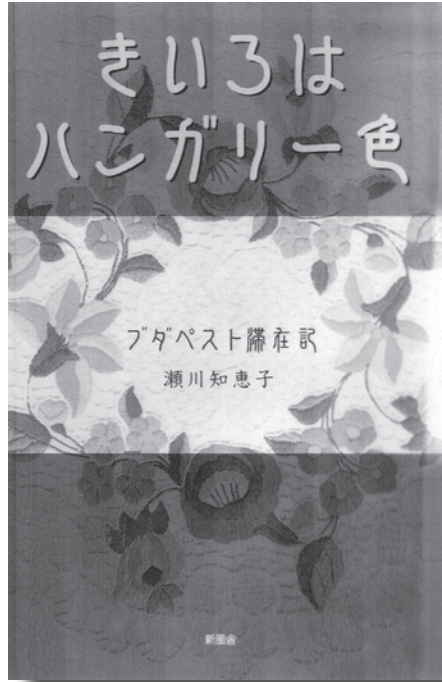
### 日本ハンガリー友好協会入会のお誘い

日本ハンガリー友好協会は、日本において、日本とハンガリーの友好の架け橋になるうとして活動をしています。一方、私の活動してきた期間の中で、この活動を通じて、ハンガリー好きな日本人同士が、全国津々浦々の友好協会の会員同士が、同じ土壌で話ができることで気持ちを通わせ、広く友好を結ぶことが出来たという意外なメリットもありました。

皆様も、ハンガリーから帰国されましたら、是非、日本ハンガリー友好協会の活動にご参加いただきたくお誘い申し上げます。滞在体験を生かして、ハンガリーとも、そして日本人の仲間とも積極的に友好を楽しまれてはいかがでしょうか。皆様のご入会をお待ち申し上げます。

# 向日葵が結んだ縁

瀬川 知恵子



2004年、ブダペスト滞在生活を綴った『きいろはハンガリー色』(新風舎、2004年) 発刊時に写真を提供していただいた T 氏の誘いで入会した日本ハンガリー友好協会。ブダペスト滞在時のハンガリー人の友人、Mさんからは是非にと紹介された日本在住のハンガリー人 H さんに向日葵畑の写真を探していると相談した結果、T 氏を紹介されたものである。友達の友達の友達が、また友達になった。

私の人生には向日葵という花が付きまとう。「向日葵のような人」、「花で言えば向日葵」等々。花の名前が発声されるたび、私はまたか、とがっかりした。丈夫そうで、強そうで、土臭いイメージで、女性の褒め言葉に響かない花のイメージを感じてきたのだ。

ハンガリーの夏は果てしも無く向日葵畑が広がっていた。ヒトの背丈より高く、兵士のように堂々とした立派な茎と大きな葉と太陽にも負けない大きな顔の黄色い花が海原のように風に揺れて、印象に残る風景だった。

日本ハンガリー友好協会でも T 氏夫人を紹介されると、「ひまわりの詩」というご著書をいただいた。今は亡きご令嬢の思い出を綴った御本であったが、「向日葵」がまた、ここで繋がったことに、私は、言いようの無い縁を感じた。胸を打つ逸話の中で、ご夫妻が大きくなるまで育てられたご令嬢が、なにより、向日葵の花が大好きだったこ

とを知り、私の心の中で「向日葵」が突然、いとおいしいものに変わった。

昨年は、夫が協会の事務局長の任務に着いたことから、私も経理の仕事を中心に、ボランティアで手伝うことになった。日本とハンガリーが外交開設140周年という記念の年にあたり、年間行事をまとめたフェスティバル・プログラムを作成することが決まり、夫が担当責任者になったことから、当然のように、私も手伝い要員として動くことになった。

作業は想像を絶した労力と時間を要した。全国の支部や各地協会に連絡をする最初の段階からつまづいた。過去の情報内容は機能していなかったし、各地の執筆承諾への反応は薄く、関心も低かった。想定ページ数獲得は至難の業に見えた。

誰に頼めばいいのか、誰の承認をもらうのか、何を書いてもらうのか、地方を代表したものになるのか、写真や資料はどうするか、記念行事はあるのか。頼む側、頼まれる側で理解にギクシャクしたものがあり、原稿が集まるまでに膨大な時間がかかった。印刷会社とは校正時間の契約があり、予算も限られている。予定日までに本当に完成できるのか。初めて経験するとまどいと心配だった。

冬の間は、印刷会社と集まり始めた原稿をめぐって、校正のやりとり、確認、追加、変更、連絡等、時間と費用の契約制限ぎりぎりの作業が続いた。朝も夜もなく、いつもパソコンと電話とファックスに向かって記憶がある。印刷会社が利益を度外視して協力してくれたことは嬉しかった。理事会が何度も集まって見直し作業を行ない、実行委員会、四十三協賛企業、大使館や宮内庁に向けても十分な構成になっているか、徹底したチェックが行なわれ、ようやく半年がかりで完成した。

出来上がった記念プログラムは想定予算内でページ数を大幅に増やし、上質で見事なものに仕上がった。各所から評判も上々で、当初予定部数3000部から10000部の発行へと変更になった。

プログラム作業中、各地の支部・協会や関係会社、大使館、外務省他と何度となく打ち合わせや交渉をする中で、すっかり気持ち合い通って多くの友人ができた。気持ち合い通ったからこそ、素晴らしいエッセイ

プログラムが仕上がったとも言える。お互いに苦労した多くの方々とは、今でも温かい交流が続いている。

今年は島根県や熊本県などで、新しくハンガリー友好協会支部や協会が誕生した。地方に行くほど、友好協会の活動に大変熱心で驚いている。

また、この一年は、ハンガリー関係のコンサートや競技、講演会や写真展、料理教室や映画等がぞくぞく登場して、まさに記念の年にふさわしい華やかさがあつた。カレンダーの印見落としに気をつけて、楽しみに頻繁に各地に足を運んだ。

9月、全国の集いは一日をかけた大イベントだった。ホテルの広い展示ロビーには全国の展示ブース、ハンガリーの児童作品が飾られた。ハンガリー刺繍や関係出版物も並び、華道や茶道の接待、実演、大広間にはハンガリー人による書や工作もあった。

舞台も見ごたえがあつた。日本舞踊、ルービックキューブ世界チャンピオン実演、写真とトークショー、カラーカ演奏、ツインバロン演奏とやすき節、スピーチコンテストと統一性には欠けるが、迫力と情熱は十分だった。

続くディナーパーティはリスト音楽院卒業生のバイオリン、エリザベト橋の説明で始まり、350人を超える大パーティは、ハンガリー料理とハンガリーワインが溢れる中、夜が深まるにつれ、話の輪に花が咲き、佳境に入った。全面的に、日本ハンガリー友好協会が企画、運営し、協会会員の協力で作り上げた大イベントだった。

イベントや会報、請求書や案内を送付する機会、連絡や問い合わせに応じるほんの少しの手伝いを通じて、協会内で知り合いが急速に増えていった。この一年間だけでも、どれだけ多くの方々と話したことだろう。実際に会場で挨拶をした後は、本当に親しい関係になった。こんなメリットは考えでもいかなかった。入会とボランティアのお手伝いに添えられた嬉しい収穫だった。

人生の楽しみの中で、気の合った友人が増えるのは格別のことである。日本ハンガリー友好協会への入会は、老若男女、実にいろいろな職業や立場の方々知り合う機会になった。還暦を過ぎた今も、人との出会いに新しい世界が拡がり、そこで新しく教えていただくことにいつも驚き、感動している。

# コンチェルト・ブダペストの誕生

角谷 聡子

的に非常に厳しい状態にさらされていた。

そんな中、オーケストラの改革に乗り出したのがケツレル・アンドラーシュ(日本ではケラーとして知られているがハンガリーの発音ではケツレル)であった。ケツレル・アンドラーシュは、ケツレル弦楽四重奏団の第1ヴァイオリン奏者として世界的に活躍し、国立フィルハーモニーとブダペスト祝祭オーケストラのコンサートマスターを勤めたこともある。

彼は2007年に音楽監督に就任するとすぐに3年の強化プログラムを打ち出し実行に移した。それは、(1) モーツァルトやハイ

ドンの古典の曲を通してオーケストラの基礎を築く(古典の曲を綺麗に演奏することはとても難しく、これをマスターすれば



photo by Hrotkó Bálint

その後の作曲家の曲を弾く時にも応用がきく)、それと同時に(2) 現代曲をたくさん演奏する(現代曲には、より豊かな表現力が要求される)、(3) 2年目にはベートーヴェンの交響曲を取り入れる(古典で学んだ基礎に、ダイナミックな表現と力強さ、そしてロマン派の表現も要求される)、(4) 4年目の今シーズンにはブラームスやブルックナーも演奏する(オーケストラの編成も大きくなり、また違う音の出し方が要求される)というようなものである。

ケツレルは、こうしたプログラムにのっかってプロのオーケストラとしては異例の、本番前約2週間という綿密なりハーサルによって、言葉通りオーケストラを育ててきた。そのエネルギーは計り知れない。時には、ほんの何小節かで1~2時間が過ぎた。時には、これ以上ないと思うくらいの厳しい言葉も飛んだ。そんなりハーサルに耐えられずにオーケストラを去る団員も多かった。

特にこの数カ月は団員にとっては、とても苦しいものだった。何故なら、もう何ヶ月も給料の支払が滞っていたからだ。それでも誰ひとりとしてリハーサルを休む者はいなかった。皆これまでやって来たことに自信を持って、オーケストラの未来を信じ情熱を持って音楽に取り組んでいるからだ。

マジヤール・テレコムからコンチェルト・ブダペストへーこれはただ名前が変わったという以上の意味がある。3年間の準備期間を経て、ようやくコンチェルト・ブダペストとしてのスタート地点に立つことができたのだ。

この名前には、ケツレル・アンドラーシュのオーケストラに対する大きな願いが込められている。名前の中にもある「ブダペスト」これには、ブダペストを代表するオーケストラになって欲しいという願い、「コンチェルト」には、コンサートという意味と、協奏曲という意味があり、どちらもクラシック音楽の中で重要であり、かつ世界中どここの国の人にも通じ、親しんでもらいたいという願いが込められている。

コンチェルト・ブダペストとしてのこれからの展望をケツレル・アンドラーシュに聞いてみた。「今までハイドンの交響曲をたくさん演奏してきたが、来シーズンはさらにモーツァルトやシューベルトの交響曲も取り上げていきたい。」また、バルトークの音楽についても彼の考えをはなしてくれた。「バルトークの音楽は、ハンガリー人にとってだけでなく、音楽をするすべての人にとって重要な作曲家であると思う。そして彼の音楽は、まさにハンガリー語で話しているようなのだ。だから、ハンガリー人として、ハンガリー語を話す者としてバルトークを正しく理解し、世界に発信していくことが一つの役目なのではないかと思う。」

最後にコンチェルト・ブダペストを好きだと公言するコチシュ・ゾルターンのトークから引用したい。「コンチェルト・ブダペストは、計り知れない才能を秘めたオーケストラである」。皆様も誕生したばかりのコンチェルト・ブダペストの成長を、どうか暖かく見守っていただきたい。

# プールの中から

長沼 敦

大国・ハンガリーへ導いてくれた動機の源泉である。

ハンガリーに渡り、1部リーグでプレーして3年目を迎えている。日本では分からない



かった多くのことを知ることが出来た。私は日本体育大学の出身で、学生時代に多くのオリンピックと接する機会があった。オリンピックでメダルを獲得されたキャリアを持つ先生にこんなことを言われたことがある。「世界に勝つためには、先ず世界を知らなければならない」

相手に勝とうとした時、その相手を知ることがスポーツに限らず、戦略上必要不可欠である。当然のことである。だが、日本と世界トップレベルの水球を比較した場合、あまりにかけ離れすぎている。まだ選手として幼かった私にとって、世界の水球を知ることとは、おとぎ話を読み空想の世界に胸を膨らませるようなものであった。

スポーツの醍醐味とは何であろうか？これはどのレベルに限らず、「勝負に挑み、勝利すること」にあると私は考えている。運動会の徒競走、趣味のテニス、健康維持のために始めたマラソン、プロの水球など、どれも対戦相手に勝つことや、自分の持つ記録をコンマ1秒でも更新することにスポーツの旨味はある。

出来る限りを尽くしてもそれが達成出来ないことはある。敗れた時は自分自身を卑下することなく素直に勝者を讃えて、また自分を振り返り反省することで、成長と、次回の勝者と成りえる権利を手にする。

このような考えが出来ようになってから、私は世界に挑み、世界のトッププレーヤーを目指すことを目標に掲げている。中途半端ではいけない。中途半端な行為は中途半端な結果しか生まず、それはスポーツ選手、しかも日の丸を胸につけたことが

ある選手のするべきことではない。競技者である以上、ナンバーワンの選手のみが知る栄光を勝ち取ることが、唯一無二の目標である。

学生時代から心の中に秘めてはいたが、日本の水球界の現状、自分という選手のレベルから言い出せずにいたことである。それこそが中途半端であった。

そして学生を卒業するとともに、ハンガリー語はもちろん話せず、英語すらままならない中、知人の伝を頼りにハンガリーへと渡ってきた。

そして私は水球を通じてハンガリー人を知った。Székesfehérvárでプレーし始めた際、家族のように支えてくれたNémeth Lászlóファミリー。監督と選手という関係以上に、時には兄弟、時には友人として大きな心の支えとなってくれたDabrowski Norbert。それぞれにハンガリー人に対する印象を持っておられると思うが、彼らと会い過ごした時間はかけがえのないものであり、私にとってハンガリー人とは愛情と優しさに溢れた彼らのような人達である。

ハンガリーの水球は2000年のシドニー、2004年のアテネ、2008年の北京とオリンピックで3連覇を成し遂げた。全員が同じメンバーではないが(水球は13人がメンバー登録できる)、6選手と監督は8年間変わらずに代表チームを牽引した。彼らは生きながら、現役選手でありながら既に伝説である。

その全員ではないが、何人かの選手と直接対戦する機会もこれまでであった。まだ、がっぶりよつのレベルには達していないが、多くのことを学び、ほんの僅かずつ近づいていると実感している。

回り道はしたが、今こうして水球という世界で頂点を目指すことが出来ている。まだまだ道半ばではあるが、自分の想いを曲げずにこの道を選んだ自分を誇りに思いたい。そして名前を挙げればきりが無いほど多くの人に支えて頂いていることに改めて感謝したい。ブログに日々の出来事を綴っている。是非、一度、ご覧いただきたい。http://waterpolonuma.jugem.jp/

## エコノミストのハンガリー回想(3)

### 70年代のハンガリー

佐藤 経明

その場で読むと、「われわれは佐藤氏をまるともな経済学者と認め、これこれの処遇を与えた。貴下のところでも同じ処遇を与えることを望む」と書かれてあった。私が感動したのは言うまでもない。しかし、ブカレストの研究所では、「フリッシュからこれほどの信頼を得るとは」と驚きながらも、「党中央に問い合わせなければならぬ」と、待機している間に次の目的地、ソフィアに向かう日が来た。ブダペストとブカレストとの間には、これだけの「距離」があった。

本誌編集長の盛田氏は、「ハンガリー動乱鎮圧の中から登場し、何の『正統性』も持たなかったカーダール政権が、時間をかけて『実体的正統性』を獲得していった」と論じている。私は「事後的正統性」という言葉を使っているが、意味していることは同じである。そういう眼で見ると「面白みのない」70年代は、カーダール政権がシコシコと「事後



エールリッヒ女史宅で。右端がアレック・ノーヴの正統性」を獲得して行った時期でもあったと言える。ただ、それは「内」を見れば文句は沢山あるけれども、「外」と比較したら文句は言えないという受動的なものだった。ハンガリーが70年代に東欧の「陽の当たる小島」といわれたのは、そういう「比較」からだった。

この「陽の当たる小島」に来ると、ソ連の学者たちも気が緩むらしい。ソ連の高名な経済学者、アベル・アガンベギャンが70年代半ば、ブダペストの少数非公開の会議で、ソ連経済が抱える病弊を完膚なきまでに批判したことがある。その直後にハンガリーを訪れた私は、その非公開ペーパーを貰ったので、77年に東京で開催された国際経済学協会(IEA)の大会で、アガンベギャンが行ったお仕合せの報告を安心して批判できた。

このペーパーをくれたのは、当時、経済企画庁付属研究所の所員だった、今は亡きエールリヒ・エーヴァである。彼女と知り合ったのは1971年秋。彼女にとっては三度目の夫、レーヴェス・ガーボルともども、私がその後の37年間にこの2人に負うもの

は言葉に尽くせないほどだ。もう一人挙げるとすれば、サミュエリ・ラースローがいる。この二組の友人のお陰で、私はその折折の国内の政治経済上の変化ばかりか、ソ連圏情勢についても見事な解説を得た。サミュエリはスターリン批判前後、モスクワ大学経済学部にて在学していたから、当時のクラスメートにはシメリョフ、ペトラコフ、ガヴリル・ポポフなど、ベレストロイカ時代に脚光を浴びた錚々たる連中がいた。これらの人達ともモスクワで立ち入った議論が出来たのは、サミュエリのお陰である。

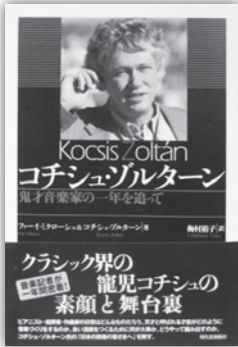
しかし、勿論、良いことばかりではない。70年代も後半になると、鬱屈した雰囲気次第に強く感じられるようになった。その背景には73年のオイル・ショックをきっかけとした経済情勢の悪化があった。1974年3月、「経済改革の父」といわれたニエルシュ・レジューが党政治局員から降りたあたりが転機で、保守派の巻き返しが発端となった。チコーシュ・ナジももはや「ブレーキは過渡的」とは言わず、「経済をプッシュ・ボタンで動かせるように思っている連中がー」と剥き出しの辛辣な言葉を使うようになっていた。しかし、経済には「経済の論理」があるからこの「暗闘」も1975年末頃がピークで、降格されたニエルシュは新年を迎える頃には「われわれは勝った」と内輪で語っていたようだ。

カーダール主義がこの時期にも後退しなかったのは、経済的に与えられるものが少なくなったことへの「代償」という側面があったと思う。それは悪いことではなかったが、より多くを望む知識人たちには鬱屈した不満が蓄積されつつあった。76年秋の一夜、エーヴァ・ガーボル夫妻から「ここ10年くらいの社会主義にどんな見通しを持っているか」と直裁に問われ、まともには答えられず、「5年、10年のタームではペシミストたらざるを得ないが、15年、20年となると、ソ連型の体制がそのまま維持できるとは思えない」と答えたことを思い出す。この「20年」が「控え目」に過ぎたことが分かるには、その後の「15年」が必要だったが、この時、エーヴァが「In essence it is the same system」と表現し、カーダール主義もソフトな「皮」を剥いていくと党の権力独占という硬い「核」が出てくることに変わりはない、という認識は共有されていた。この「核」が次第に侵食されていくのは80年代の物語である。

特別寄稿



仕事柄、ネットや新聞・雑誌でたくさんの文章を読んでいるので、家で読む書籍は仕事と直接関係のないものになる。しかも、長



編小説のような長いものではなく、新書のように短時間で読める書籍がほとんどだ。最近読んだものの中で少し長いものでは、梅村裕子さんが訳された『コチシュ・ゾルターン』(現代思潮社、2007年)が面白かった。ハンガリーの音楽記者が1年にわたって、コチシュを追いかけた通信・コミュニケーション報告である。一流の音楽家がどのような日常生活を送っているのか、どのような音楽作業を行っているのかが、手に取るようにまどとはいかないが、少しだけ分かる本である。もっと創造過程の内部に踏み込んでいればもっと興味深いものになったはずだが、多分、それは音楽家本人が書く以外にないだろう。しかし、音楽家がそれを記す余裕や能力があるかどうかはまた別問題だから難しい。芸術であれ科学であれ、創造過程の分析は教育の発展にも役立つので重要だ。芸術分野に比べて、学問分野の創造過程を再現して描写することはそれほど難しくなく、私が翻訳した『コルナイ・ヤーノシュ自伝』(日本評論社、2006年)などは経済学者の創造あるいは思考過程を知る上でたいへん貴重な資料でもある。旧社会主義世界から生まれたコルナイ理論のユニークさが多くの経済学者を惹きつける魅力になっているが、この自伝からコルナイの理論関心の発展と理論形成のプロセスを読み取ることができる。それが専門家の高い評価を受けた理由だと考えている。社会学ではこのような創造過程研究が独立分野としてあり、科学過程論とか創造過程論とか呼ばれるものがそれに当たるが、研究者の数はそれほど多くない。多くの芸術家が自らの創造プロセスを是非、書物の形にして欲しいものだ。



私の日ごろの読書は手当たり次第。新聞広告で面白そうなテーマがあると、Amazonで注文し、日本へ帰国した時にまとめて持ち帰る。ここ1~2年注目しているのは、生化学者の福岡伸一である。『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書、2007年)は彼のヒット作になったが、「生命は流れの中にある」という基本視点から、生化学のいろいろなテーマを非常にうまく物語に仕上げている。「科学エッセイ」とでも呼べるような分野を切り開いている。物語の構成が良くできていて、短編の推理小説のような味わいがあ

る。この続編が、『動的均衡』(木楽舎、2009年)、『世界は分けてもわからない』(講談社現代新書、2009年)である。多分、高校時代にこれらの本を読んでいたら、社会科学ではなく、生化学の分野へ進んでいたかもしれない。福岡さんの著作は高校生や大学生が生化学研究を志すバイブルになると思う。

2009年秋に日本へ一時帰国した時に、「ハプスブルグ絵画展」を宣伝していた。実際に足を運ぶことはできなかったのに、空港の書店で見つけた中野京子『名画で読み解く ハプスブルグ家12の物語』(光文社新書、2008年)を持ち帰って読んだ。なかなか歯切れのよい明快な解説で、絵画をもとにハプスブルグ650年の歴史を駆け足でめぐる物語である。絵画は私の趣味に入っていない



が、この本を読むと、それぞれの絵にある事情や社会的背景を知ることなしに、絵画を楽しむことができないことが良く分かる。もっとも、それはすべてのことについて言えることで、スポーツでもルールや競技の妙技を知らないスポーツを見てもつまらないし、ロシアの歴史時代を知らなければロシア文学作品を楽しむことはできないだろう。前提になる知識があるかないかで、作品の楽しみ方や理解の仕方はまったく違うものになる。

その時々で、関心が変わったり、ふとしたことで何かを知りたくなったり、高校時代や大学時代に読んだ本が懐かしくなったりして、購入したのに読んでいない本を書棚で探したりする。長谷川宏さんという在野のヘーゲル研究者が、1990年代初めごろからヘーゲルの作品を次々に翻訳していることが気になっていた。ドイツ哲学の難解さは良く知られているが、難しさのかなりの部分は翻訳にあるのではないかと考えていた。昔の



学者さんはヘーゲルにしる、カントにしる、あるいはマルクスにしる、難しい熟語を編み出してそれぞれの理論の新しい概念を日本語に翻訳していた。悪戦苦闘して訳したものだから、文章の言い回しも、ドイツ語原文よりも難しくなっているのではないかと思ったものだ。大学や大学院で原書購読というと、長い文章から与格や対格がどれかを探し出して解説するようなものだったから、自然と訳文も難しくならざるを得なかった。こういう先生がドイツに留学したのは良いが、ドイツ語の会話が成立しないので、内に閉じこもって鬱病になって日本へ戻ってくるという話をよく聞いたものだ。

大学研究者の道を歩まず、在野の研究者としてヘーゲル研究を続けてきた長谷川さんが、非常に分かりやすい文体でヘーゲルの翻訳本を出したことが話題になっていた。大学時代にマルクスの『資本論』を読み始めた時に、これはヘーゲルを読まないと理解できないと思い、岩波文庫の『小論理学』などを読んだが、以後はヘー

ゲルに関心が向くことはなかった。だから、長谷川さんの翻訳本を買おうと思うところまでは行かなかった。ところが、たまたま本屋で『新しいヘーゲル』(講談社現代新書、1997年)を見つけ、ブダペストに持ち帰った。なるほど、長谷川さんのヘーゲル解説は平易な言葉と語り調になっている。こういう文章は大学の先生には書けない。在野の研究者として苦勞し、一筋にヘーゲルを追いかけた成果が実っている。拙著『ポスト社会主義の政治経済学』を執筆するにあたって、第一章に「体制転換の哲学」をおき、体制転換に社会哲学的な考察を加えようとした。まさにそのような知的営みが、ヘーゲルへの関心を再び呼び起したようだ。次回の一時帰国には、長谷川さんの翻訳一式を仕入れてくることになる。

JSTVのニュース番組を欠かさず見るが、それ以外の番組はほとんど見ない。ところが、「天地人」だけは見るようにした。戦国の時代から国家統一に向かう激動の時代に生きたいろいろな武将たちの生き様は、現代にも通じるころがある。石田三成は今で言えば「会長秘書」のようなもの。秀吉会長の威を借りて、諸大名(地方支店長)を牛耳ってきた付けが、関ヶ原の合戦で小早川の裏切りにあった。諸大名の苦勞を理解して、うまく束ねる人望がなかったのだろう。やはりいくらか能力があっても、「秘書」上がりでは国(会社)を治めることはできないのだ。それはそれとして、このような国造りの時代には、大きな理想や大義を掲げて闘うという美しさがある。公的資金を盗むことに動んでいるハンガリーの政治家や彼らとつるんだ事業家とは大違いだ。旧社会主義国の体制転換に大義がなかった訳ではない。しかし、ほとんどの人はすぐに大義を忘れ、国家資産の略奪に走ってしまった。しかも、そうやって巨額の富を築いた人が国の指導者になっている。キプロスやタクスヘイヴン地に資産を移している政治家が国民に緊縮政策を訴えるのは、どう考えても理屈に合わない。だから、極右的な政治勢力が台頭してくる。いつの時代にも腐敗した政治家に絶望して、極右や極左への支持が広がる。

こうやって考えていると、ふと以前に購入したまま頁をめくっていない本に手が行った。秦郁彦『南京事件一増補版』(中公新書、2007年)である。南京事件70年を機に、1986年出版の旧版に、「南京事件論争史」を加えた増補版が発刊された。1937年の南京事件はそれから8年にわたる「対中戦争」への突入を決定づける事件になった。中学時代の図工の先生が、「戦争はいかん」と何度も授業中に語っていたのを思い出す。終戦から10年以上も経っていたが、「夜中に叫び声をあげて目を覚ます」という。中国人を池の縁に座らせ、日本刀で首を切った時の情景が思い浮かぶというのである。いわゆる「試し切り」と呼ばれる行為は、対中戦争で良く知られた処刑法だった。

南京攻略に大義はなかった。いたずらに戦線を中国全土に拡大する侵略戦争に、何の大義もなかった。南京攻略に駆り立てられた日本兵は、十分な後方支援を受けることなく、肉弾戦を強いられた。その苦しさと同僚を殺された憎しみ、飢えの中で、南京城の

攻略が始まった。他方、中国軍は撤退時期を誤り、正面突破を試みた部隊や揚子江に逃れようとした部隊は、機関銃掃射で皆殺しにされた。揚子江が中国兵の死体で埋まったという。その数は万を超えると言われる。しかし、これはふつう「南京虐殺」の数字の中に含まれない。日本軍に大義のない侵略戦争だから、撤退する軍人を大量に殺したのも虐殺のうちに入ると思うが、不法なものであれ、軍人の殺戮は「虐殺」に含めず、「戦死」という扱いになるらしい。

「南京虐殺」として批難されているのは、南京城制圧以後の日本軍の無法ぶりである。とにかく兵士は飢えと憎しみに固まっていた。だから、戦闘が終わった後は、民家に押し入り、婦女子を強姦し、食料品を強奪した。将校もそれを止めなかった。強姦・強奪の証拠を残さないために、いとも簡単に民間人を殺し、家屋に火を付けた。さらに、難民区へ流れた中国兵を摘発するために、難民区から成年男子を連れ出し、処刑するのが日課になった。これは南京攻略からほぼ2カ月にわたった。捕虜をとつても収容する施設がなかったのに、「捕虜をとらない」ことが暗黙の了解になった。つまり、捕虜はすべて殺すということだ。部隊将校の「百人切り」や「二百人切り」の首切り競争が行われたのは、このような異常な状況の出来事である。

このような行為は国際法に違反するだけでなく、皇軍(天皇の軍隊)の倫理とも相容れぬはずである。しかし、大義なき戦争はすべての倫理的な足枷を断ち切ってしまった。この南京での虐殺をめぐる、現在もなお、日本では「大量虐殺派」と「虐殺まぼろし派」の論争が続いている。もっとも、秦氏によれば、「まぼろし派」のほとんどは虐殺の存在を否定するわけではなく、数を最小限に見積もる派だ。ただ、数名の論客はまったく虐殺はなかったと主張しているようだが、これはいただけない。

陸軍が慰安婦を送りだすようになったのも、この南京事件を教訓にしていることだ。しかし、大義のない戦闘によって、兵士の心は荒れ、無用な殺生を続けることになった。日本国あるいは日本人はその責任をどうとったのだろうか。A級戦犯の処刑で、日本帝国主義の侵略戦争の責任問題は解決済みと言えるのだろうか。

戦国時代を終焉させた徳川幕府も、250年の歴史で幕を閉じた。社会の体制が変わる大変動の時代には、再び大きな大義や理想が現れる。第二次世界大戦から生まれた社会主義が崩壊して、新しい社会体制が生まれる。こういう変動の時代には、やはり社会哲学が必要になる。ヘーゲルもまた、フランス革命を目の当たりにして、社会発展の精神(理性)に考えをめぐらした。「金もうけ」や「生活のノウハウ」を教える書物も良いが、こういう時代には、もっとインパクトのある古典を読んで、思考力を付けたいものだ。せつかく社会が大きく変動する歴史時代に生きているのだから。

## ハンガリー30年、物理学一筋【その2】 板井 一政

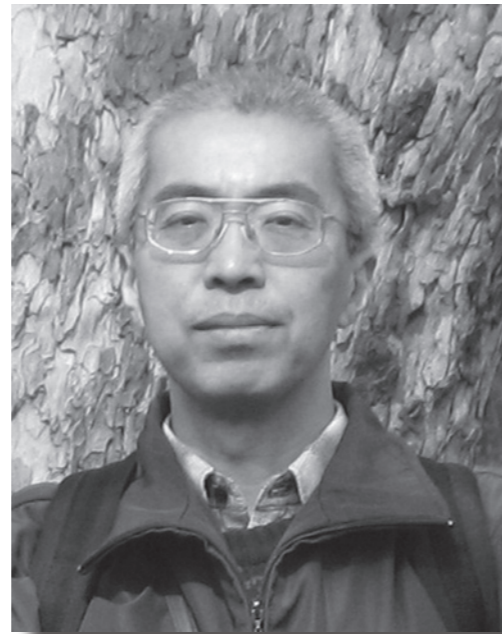
予定通りの一年半後に仕事が切りの良い段階にあったなら、日本に帰ったかもしれません。実状は、その頃にはまだ切りをつけられる状態でなく、「始めた研究は終えるべし」と云う責任がありますから、その段階で帰る訳にゆきませんでした。ただ、研究と言うのは芋ほりのようなもので、つるを引っ張ると(運が良ければですが)次々と芋が出てくるので、切りのつけようが難しくなります。そんなことをしている内に私の方が複数のつるで当地に縛られる様になったわけです。ある意味ではぬるま湯にどっぷりと浸かってしまったとも言えますが、私が授かった才能の程度を考慮すると、許される罪の範囲内だと思います。

ハンガリーでは最近自然科学に人気が無いようで、同僚たちは嘆いています。今年の大学進学希望を見ても、高校の物理の先生を養成する学科へ願書を提出した人は、全ハンガリーでたったの7名だったとのことで、大変なショックを起こしています。初等中等教育で良い先生がいなかったら研究者になろう等という生徒は出てきませんから、今後のことを考えると、ハンガリー物理界の大問題です(日本でも理科離れの傾向が強まっていることを聞きますが、ノーベル賞四重受賞で流れが逆になることが期待できましよう)。

物理学にとって現在は大躍進の時代ではなく、地道な発展の時期です。去年のノーベル賞の小林益川理論は37年前の1972年に出されましたが、それが実験的に確認されたのは僅か8年前の2001年のことです。物質を構成する最も基本的な粒子(素粒子)について研究する分野ではこのように理論的研究が先走りしています。私がやっている物性物理の分野では逆に実験的研究が理論を先導しています。物性物理とは、たくさんの原子から構成される、目で見える大きさの物質が示す多様な性質を研究する分野ですが、これまでに無い新しい性質を示す物質が実験室で次々と作り出されるので、それを原理的に説明する仕事の方が後ろから一生懸命追いかけている状況です。「目で見える物質」が如何にたくさんの「原子」から造られているかは、原子をテニスボールの大きさに例えると実感できます。「目で見える物質」は一辺が千キロメートルの箱の大きさになります。孤立した、一つの原子の振る舞いは理論的に完全に知ることが出来ませんが、これだけの数の原子が集まると、一つ一つの原子の研究からでは予想も出来ない現象が起こるのです。抵抗無しに電気を伝える、という日常の常識に反した「超伝導現象」とか、逆に、2000年以上前から日常的に知られている「磁性現象」(磁石の性質)など、その多様性は数限りありません。「目で見える物質」のこの

ような多様性を、原子レベルで有効な基本原理から出発して、物質レベルの法則を導き出して理解するのが物性物理学の醍醐味です。

素粒子物理学の実験装置というのは、今では超々巨大になっていますが、物性物理の実験は小さくて済むものも多く、個人個人のアイデアの重要性が高いですので、ハンガリーのような小国にもやれることはたくさんあります。そのため物性物理には、民族性が反映されているな一、と思わず言ってしまうような仕事もときどき見られます。ハンガリーが30年前に「低次元のメッカ」と言われたのも、独創的なアイデアを出す非常に高次元な頭を持った実験家と理論家が協力し、互いに助け合う家族的な研究環境を構築し保全していた努力の果実でした。ちょうど「メッカ」期の全盛時に当地に来れたのは、偶然の重なりによるとは言え、私にとっては本当の幸運でした。



大雪で始めた話はやはり大雪で閉じるのが洒落ていますので申し上げますが、科学アカデミーの物理学研究所は90番のバスはすぐ走らなくなります。歩いて下山したことが何度もありました。不思議なことに、同僚と話しながら雪のなかを歩いている時には必ずと言ってよいほど良いアイデアが出てくるのです。最近大雪が少なくなったのを残念に思うのは、子供の頃の雪への憧れというより、むしろそのためです。

## エルデーイへの思い入れ 梅村 裕子

目にも鮮やかな民族衣装、コロンド村の素朴な陶器、懐かしさを覚える木彫りのセーケイ門……。古い伝統を今に残すエルデーイ地方(トランシルバニア)に興味を持ったのはいつだったか、はっきりとは覚えていない。私は1980年代初め、まだ社会主義の時代にリスト音楽院への留学生としてブダペストに降り立った。バルトークやコダーイの曲名に現れる民謡の採集地として認識したのが最初だろうか。ハンガリー人の友人が増えるにつれ、分断された旧ハンガリー領に住む同胞達の事について何人もが私的な集まりで密やかに話し合い、部屋をエルデーイの民芸品で飾り、外国人の私に熱く語る場面が幾度となくあった。今と違い、ハンガリーのメディアではテーマ自体がタブーだった。その内、親戚や友人を国境外に持つ人が多いと知り、彼らに誘われて私もその地へ出かけるようになった。民芸品だけでなく山に囲まれた自然の美しさ、伝統的な生活、アールヌーボー建築に彩られた都市、人懐っこい人々。私はあつという間にこの地の魅力にとりつかれ、エルデーイ詣でを始めた。ハンガリー人達がなぜそれほど熱く語るのか、だんだんわかってきたのである。

一方この時のルーマニアはチャウシェスクの専政下である。一部食料は配給制、ガソリンは慢性的な不足、停電も日常茶飯事だった。現地の人々は外国旅行も出来ないし、おまけにハンガリー人という当局から敵視される面もあり、ハンガリー語の印刷物を持ち込む事まで制限されていた。だから旅行といってもとんでもない不便やちよつと危ない事と隣り合わせの旅である。知人の家に泊まるにも面倒な届けが要ったので、夜になってから行くとか、まるでスパイ映画もどきである。

間もなく、ゴルバチョフのペレストロイカで東欧の政治が動き出した。ハンガリーが体制転換していく中、初の官製でない大規模デモは、ちょうどエルデーイ地方の村に対する解体計画に抗議するものでいかにも象徴的だった。時代の流れで私の生活も巻き込まれるように変化し、帰国予定は延期してしまった。めったにない歴史的な変化が目の前で起こりつつあり、居合わせた幸運を感じ、変化の行き着く先を見届けたい気持ちになった。考えている暇もなく、次々と取材に来る日本からの報道関係者に案内役や通訳としてお供し、政治の現場に立っていた。

テメシュヴァールのテーケーシュ・ラースロー牧師が発火点となったルーマニアの革命では、NHKの記者と共に現地に入り取材を手伝った。銃弾が飛び交い出したのでさすがにあわてて退散した。チャウシェスクが処刑され、これで専政から人々が開放されるかと感無量だった。雑誌の連載で取材に来られた作家の杉山隆男さんを、テーケーシュ牧師とエルデーイの作家、故シュテー・アンドラーシュ氏のところへお連れし、長いインタビューをした。それは後に『きのうの祖国』という本になった。日本人にはわかりにくい、国境線の変更で「外国」に取り残された人々の様子が日本人の目線で描かれている。

1990年代初め、一旦帰国し雑誌などでライターをしていたが、ある日ルーマニアの民族舞踊団来日というポスターが目にとまった。

写真はエルデーイにあるハンガリー人村のひとつである。しかしハンガリー人を示す記述はなく、どう読んでも単にルーマニアの舞踊団という感じだ。主催者に問い合わせると、最初はトランシルバニア・マロシュ舞踊団と書き、チラシにもそれとなくハンガリーの国旗色を使ったが、ルーマニア大使館からクレームが付き、ルーマニアを明確に示すよう強要されたという。さもありなん、と思ったがせっかくハンガリー人が自分達の踊りを日本で披露するのにルーマニア人と思われたままでは気の毒なので、問題提起を試みた。週刊誌のアエラが取り上げるというから、ルーマニア大使館に取材した。大使までお出ましになったが納得行く説明はなく、ともかくハンガリーの踊りという事実は伏せておきたいようだった。アエラに記事を書き、ちよつと騒動になった。複雑な民族問題はこんなところまで影を落としている。それにしても外国旅行が命がけだった時代を思うと隔世の感じがあり、日本にまで伝統舞踊を紹介できるようになった感慨に浸った。以後もエルデーイからの舞踊団は来日公演を重ね、愛好者を増やしているようだ。

90年代の半ばに日本大使館の専門調査員として再びハンガリーへ来ることになった。エルデーイへの関心はずつと続き、テーマのひとつとして調査した。一度は堤大使ご夫妻を視察にご案内し、セーク村やエルデーイの東端ジメシュ地方までも出かけた。「タイムマシンで百年前の世界に行ってきましたよ」。旅行から帰って開口一番、大使は会議でそうおっしゃった。

この後、作家のシュテーさんをハンガリー文学の重鎮として日本へ招いた。多彩なプログラムで秋の日本を堪能され、私は通訳として同行した。民族対立の暴動で片目を失明され、疲れやすかったシュテーさんは、食べ物合わないかもと心配し、ルーマニアから缶詰を持参されて重い荷物があった。地方へ旅行する時に、私は自分の荷物を宅配便で行き先のホテルへ送り軽装で旅の用意をした。シュテーさんにもそれを奨めたが、荷物が翌日ホテルへ着くことをなかなか信じてもらえない。紛失したら困るから自分で持っていくとおっしゃる。当時の駅はまだエレベーターがどこでもある訳でなく、奥さんとお二人の重いスーツケースを一緒に抱えて階段をひきずり往生した。宿泊先のホテルで私を待っていた荷物を見て驚かれ、帰りは送る事になったので助かった。食事にもカルチャーギャップがあった。日本のもてなしは高級になるほどその場で調理するような機会が増える。しかしシュテーさんにとって生肉や生魚は厨房で処理するものという意識が強かったらしい。日本的なものをと考える招待側の意に反して寿司はおろか、鉄板焼きや目の前で揚がる天ぷらも提案だけに終わった。それでも旅館やデパートの食品売り場などはお気に召したようだった。

現在、エトベシュ大学の日本学科で教員をしているが、新入生の中には大抵、国境外からのハンガリー人学生が混じっている。優秀な人が多いが、卒業すると故郷に帰る人の方が少数派で、本国への移住が増えるばかりの状況には複雑な思いだ。グローバリズムで伝統文化はこれからどうなっていくのだろう。

訃報は突然やってきました。9月5日、ベルリン自由大学のヨーロッパ日本語教師会シンポジウム。その会場で、同僚のセーカーチ・アンナさんがかけより、目にいっぱい涙を溜めて私の耳元で囁きました。「相馬さんが亡くなった」。一瞬、何を言っているのかわからず、「えっ、何？ 何の話?」。アンナさんは小声で「相馬さんが亡くなった」と繰り返すばかり。「どうして?何が原因?」、「わからない!亡くなったという知らせだけ」。携帯電話を切っていたため、訃報は日本のご遺族や私の家族からではなく、ハンガリー日本語教師会を経由して私達の元に届きました。わずか1カ月前の7月、相模大野のマンションに泊まらせていただき、楽しい3日間を相馬先生と過ごしたばかりの私には、その知らせは信じられませんでした。

本当に突然のことでした。9月4日の夕方、夕食を作っていた最中に気分が悪くなり、ソファに横になったまま亡くなられたとのこと。74歳でした。49日が過ぎた今でも、まだ半分信じられない状況です。あまりにも急に、そしてあまりにも早く遠く世界へ旅立たれてしまいました。

私達先生をよく知る者にとっては「相馬さん」、ハンガリーの友人、知人にとっては「ショウコ」と親しみを込めて呼ばれていた相馬笙子先生は、長年東京都の小学校で音楽教育に携わってこられる中、合唱指導のためにコーデイ・システムを勉強しようとハンガリーへ何度か足を運ばれ、定年退職後の1980年代後半にブダペストへ単身移住。老後を海外で過ごすことがまだ珍しかった時代です。しかし、昨年、健康に不安を覚え、日本へ帰国されていました。ハンガリーでは、ブダペスト日本人補習校で教鞭を取った後、長くセグド大学で日本語を教えられていたほか、ケストヘイにある人生の樹学園のサポートなど、ボランティア活動をなさっていました。

特に、私の所属するNPOハンガリー日本語教師会(MJOT)にとって相馬先生は、なくてはならない存在でした。先生は、2001年にMJOTが設立された際の設立メンバ

ーの一人。2002年にブダペスト商科大学で開かれたヨーロッパ日本語教育シンポジウムの際には実行委員、長年の運営委員、2005～2006年度には会長職にも就かれ、教師会のために尽力されていました。



その中でもとりわけ教師会発行の日本語・ハンガリー語語彙集に関しては、執筆者から集めた原稿を編集委員や校正者といっしょにご自宅のパソコンでコツコツと編集し、出版後は在庫管理、販売、会計など、何から何まで雑用一切を全て一人で引き受けて下さいました。

そんな相馬先生を一言で言い表すとすれば、圧倒的な存在感です。学歴も収入も地位も意味がなく、いざという時には、自分が正しいと信じることを勇気を持って発言される稀有な方でした。私達会員はいつも先生に安心感をもらい、先生が応援してくれるなら、少々無理な事業でもできそうだと思わせてしまう威力、オーラの持ち主でした。

同時に、先生は大変細やかな心配りのひとでした。教師会への度々の寄付を始め、先生の手料理による「おいしい」運営委員会や大人数の研修会をブダペストが一望に見渡せる自宅のサロンで開かせていただいたことが何度あったことでしょう。

私が初めて「相馬さん」とお会いしたのは、かれこれ20年以上も前。以来家族ぐるみでお付き合いさせていただきました。少々怖そうな相馬先生でしたが、子供達には頼りがいのある存在。10年ほど前に亡くなった実家の母にとっては、ハンガリーでの

良き友でした。母が亡くなった後は、相馬先生は私の愚痴のこぼし相手。決断に迷った時など、適切な助言で励まし支えてくださいました。大胆な発想、論理的な考え方、そしてどんな人にもおもねらない、凛とした生き方と態度にあこがれさえ感じました。

相馬先生を語るとき、ファッションに触れないわけにはいきません。鮮やかなカラーメッシュの入った茶髪、爪ごとに色が違ったマニキュア、大振りな指輪やアクセサリ、大胆な色柄の服、おしゃれな帽子など、普通の日本人ならとても似合わないコーディネートが相馬先生にはぴったり。型にはまらない先生の性格そのままでした。

たばこをくゆらせながらはすに構えて話をする姿には、単刀直入の物言いとあいまって、姉御の雰囲気は凛しい、初対面の方は幾分の恐怖感を覚えたかもしれません。しかし、実は心優しい方でした。亡くなる少し前に日本からメールをいただき、ハンガリー語で「もうアンナと紀子にご飯を食べさせてあげられないのが寂しい」と書いてくれたのが、思えば最後の便りでした。夕暮れ近く職場で終わらない仕事を前に、同僚のセーカーチ・アンナさんと二人で「疲れたなあ」とため息をついていると、「晩御飯でも食べに来ない?」とタイムリーな電話がかかってきて、夜景もおかずにして相馬宅で晩ご飯をご馳走になり、元気というお土産ももらって帰宅したことが思い出されます。

もうその心優しい姉御の笑顔には会えません。しかし、かけがえのない友人、先輩、メンターを失ってしまったという喪失感とともに、未だに半信半疑な状態が続いているのは、相馬さんが肉体的にはあの世に旅立たれても、存在感という点ではこの世に強烈な刻印を残して逝かれた証かもしれません。では、相馬さんは私たちに何を残して逝かれたのか、相馬さんの存在感とは何だったのか、それを考える日々ですが、一つ確かなことは、人間は誰しも、思い出す人がいるかぎり、肉体は滅びても精神は滅びないということです。その思い出す人で私はあり続けたいと思います。

## 私らしく

ハンガリー国立バレエ団  
浅井 友香

私が初めてハンガリーに来た時の印象は「なんて素敵な国なんだろう!」でした。ロシアのサンクトペテルブルグにあるバレエ学校に2年間留学した後、ハンガリーにやってきた私にとって、ここはまさにヨーロッパ。街の雰囲気や人など全てのものが輝いて見えました。後々ハンガリーで知り合った日本人の方に話を聞くと、最初は嫌になったという意見が多く、同じ日本人でも全然感じ方が違うんだと思いました。

ロシアのバレエ学校を卒業後、どこのバレエ団を受けようか迷っていましたが、周りや親から「せっかくロシアで学んだのだから海外で挑戦してみたら?」という温かい後押しもあって、とにかくいろんな国のバレエ団にメールを送りました。最初は不安でしたがどこもすぐに返事を返してくれ、その中でハンガリーがプライベートオーディションをしてくれるというのですぐ受けることに決めました。その時不思議と迷いがなかったのはやっぱり何か感じていたからかもしれない。去年の10月にハンガリー国立バレエ団のオーディションに受かり、すぐ働くことになりました。海外での一人暮らし、バレエ団で働くことなど全てが私にとって初めてのことでしたが、そのことにも不思議と不安はありませんでした。

しかし正直、ハンガリーにあんな素晴らしいオペラ座があることも知らず、ましてバレエ団?という疑問を抱いていましたがその考えはすぐ変わりました。バレエ団のレベルも一流でレッスンや公演などやりがいがありますが、何より一般のハンガリー人にとってバレエや音楽はとても身近なもので毎回公演にはたくさんの人が観に来てくれます。それだけで踊り手にとってはモチベーションが上がるし、踊っていてもすごく楽しいです。またハンガリー人はみんな温かい人ばかりで、私はもっとバレエ団での関係は、ぎくしゃくしてるのかな~と思っていたのですが、皆さん本当に仲が良く、私のような外国人でもすんなり受け入れてくれ、友達もすぐにできました。

もちろん、楽なことばかりではありません。言葉の壁や一人で暮らす寂しさ。そしてどこへ行っても人種的な差別はあります。バレエの場合、母国以外の国でやっていくには仕方のないことですが、特に日本人は西洋人の中に入れば目立ってしまいます。時には目立つことも大切ですが、私はバレエ団に入ったばかりなのでもちろん群舞(コールドバレエ)です。群舞はみんなと揃える事、一体になることが求められるので、目立ってしまう私は役から外されることも多々あります。みんなが踊っているのに私だけ踊れない。そんな疎外感には何度も何度もくじけそうになり、日本に帰ることも本気で考えました。

でも、そんな時、私を支えてくれたのは、応援してくれる人たちでした。

日本からエールを送ってくれる友達や家族。同じように海外のバレエ団で頑張っているバレエダンサーたち、そして何よりハンガリーに住んでいる日本人の方たち。1、2回会っただけでも心の底から応援してくれ、私をハンガリーと一緒に頑張る「仲間」として受け入れ、温かく見守ってくださっています。「みんなも頑張っているんだ!私も負けずに頑張らなくちゃ!」と何度も励まされました。日本にいたら出来ないような素敵な出会いや、日本人として日本を誇りに思うようになったり、私にとってバレエばかりでなく他のことでも色々経験ができました。

今、私は2年目のハンガリーでの生活を本当に楽しんでいます。少しずつですが言葉も覚え、周りとのコミュニケーションもとれるようになってきました。休みの日は友達と買い物に行ったり、ホームパーティーをしたり、去年よりも充実した日々を送っています。

これからはバレエだけでなくいろんなジャンルのダンスにも挑戦してみたいと思っています。それから言葉もこの機会にぜひマスターしていけたらいいです。

バレエ団での契約は一年ごとなので来年ここにいられるのかも全くわかりませんが、私はこの国が大好きです!ずっとずっと働けたらいいな~と思っています。

これからも人と人のつながりを大事に、私らしく、ハンガリーで踊っていきたいです。

そしてぜひ、みなさんも一度オペラ座へバレエを観に来てください!!!お待ちしております!!!



## 留学生自己紹介

### 習慣と伝統から学ぶ音楽

リスト音楽院大学院ピアノ科

安田 恵子

ハンガリーへ来て早4回目の冬を迎えました。毎年この時期になるとただでさえ日が短いのに、それに加えて暗く厚い雲がどんよりと空を覆うので、夏の強すぎる日差しが恋しくなる毎日です。

私は現在、リスト音楽院の修士課程に在籍しています。これまでの3年間は、基本的にレッスンのみのパートタイムコースに籍を置き、計画や目標を自分で決めて行動していました。とは言っても全てがお膳立てされている日本とは違い、こちらでは自分から動かない限り何も出来ません。それに意思表示をするのにも言語の壁が高すぎて、始めの一年は手探りで様子を見ながら進んでいく感じてました。最近は、さすがに少しはまともになった様な気がします。それでも時々、例えばコンチェルト(協奏曲)をやりたいと伝えつつもりで候補を挙げて頂いたら全てコンサート(演奏会用)ピースだったとか、6月の本番を直前まで7月だと思われていたとか、数え上げればきりがありませんが、そういうすれ違いを経験する度、もっと努力しなければいけないと痛感します。

それでも先生のレッスンはとても素晴らしく、毎日が驚きと感動の連続でした。こちらの先生方は、言葉でも非常に深く、内容の濃いレッスンをなさいますが、時にそれ以上に、何気なく弾いて頂いた演奏に驚かされる事があります。ほんの一瞬出された音で、世界観が変わる事もよくあります。そんな貴重なレッスンを受ける事に集中出来た3年間は、とても有意義な時間でした。今は決められたカリキュラムに従い、実技や室内楽の他、様々な講義に出席して勉強しています。若干窮屈に感じなくも無いですが、ハンガリーの歴史や文化、民謡などここでしか学べない科目が沢山あり、とても充実した生活を送っています。

ハンガリーへ来た一番の動機は、日本で受けた今の先生のレッスンに感銘を受け、この先生のもとで是非学びたい、という思いからでした。それからクラシックの本場ヨーロッパで、輸入されて根付いた音楽ではなく、伝統として受け継がれている音楽に触れてみたかっ

たというもあります。

実際こちらに来てみて、言語に始まり生活、文化、あらゆる習慣が日本と全く違い、最初は戸惑うばかりでした。特に時間に対して、こちらはとても寛容で、例えばトラムはいつ来るかわからない、スーパーや郵便局では大行列、検針や配達も何時～何時の間!と驚きの連続で、日本の時刻表の正確さが逆に奇跡に思えるほどでした。しかしやがて慣れてくると、この国の人達がゆとりを持って生活している事が分かってきました。乗り物では当たり前の様にお年寄りに席を譲り、カフェでは何時間も座っておしゃべりを楽しみ、走ったり急かしたりするのもあまり見かけません。

そして音楽も格式張った堅い芸術ではなく、ゆとりある生活の一部として人々に親しまれている事を強く感じます。ここでの演奏会は、聴衆は皆、正装していても温かく奏者を迎え演奏を楽しみ、感想をはっきり態度で表します。そんな光景を目にする度、服装や照明は違ってもほんの200年位前までは、今では気の遠くなる程偉大な作曲家達もこんな雰囲気の中において、それが今でも受け継がれているのだと思うようになりました。

その他にも、時刻を告げる教会の鐘、古く優雅な建造物、それらが広がる美しい景観に日々刺激を受けています。譜面の音符と音符の間をじっと見つめても、伝記をいくら読んでも、そこから冬の風の匂いや春の緑の鮮やかさを知らずに感じ取る事は出来ません。今も脈打っているものなら尚更・・・そんな得難いものがすぐ傍にある、素晴らしい環境に身を置けることに、そしてそのために力を貸して下さった全ての方々に感謝しながら、これからも研鑽を積み重ねていきたいと思います。



### あわてず、あせらず、あきらめず

ELTE教育学部教員養成科

大山 彩

1995年12月、当時10歳の私は地元の合唱団の演奏旅行で初めてハンガリーを訪れた。ハンガリー人とはとにかく素朴で優しく、遠く日本からの来客を精いっぱいの気持ちを込めて出迎えてくれた。コンサートではハンガリーの合唱団と共演し、言葉や文化の違いをこえて歌声を合わせ、それはまるで水の輪のように広がった。あのなんとも言えない心地よさが私を虜にさせ、この地にまた呼び戻したといっても過言ではないと思う。

しばしばハンガリー人達は「音楽なら他の国でも留学はできたのに、どうしてハンガリーに来たの?」と私に聞いてくる。そんな時私はこう言うことが多い。「9歳のころからハンガリーのわらべうたに触れて、ハンガリー語の合唱曲を歌い、それらをコダーイメソッドで教わっていた私にとって、ここに来ることはある意味自然だったと思うよ」と。実際ここに来て、コダーイメソッドの一つの特徴といえるソルミゼーションやハンドサインも、幸い小さいころからずっと触れていたものだったため、すぐに合唱や教授法の授業にもなじめた。

18歳で渡決して早6年弱。ELTE大学では人文科学部音楽科合唱指揮専攻と教育学部教員養成科に所属している。しかし「合唱指揮」と聞いて“?”が頭をよぎる人も少なくないと思う。普通、指揮と言えば指揮棒を持ってオーケストラの前に立っている姿を思い浮かべると思う。「合唱指揮」というのは日本では非常にマイナーだが、簡単に言えば合唱曲を専門とする指揮者のこと。また、合唱付きの交響曲やオペラなど、オーケストラを伴う作品において、合唱団のみを事前に指導する者の

事を言う。だから、オーケストラを指揮する講習会などがない限り、指揮棒を持つことはない。

音楽科の授業で興味深い事の一つは、日本では約2～4週間ほどの教育実習が、ここ

## 留学生自己紹介

### ハンガリーに戻ってきた理由

三川 桃

私が初めてハンガリーの地を踏んだのは2004年の8月、18歳の時でした。あるハンガリー人の友達による短期留学プランに参加したことがきっかけでした。そもそも私がハンガリー語を勉強するようになったのは、大学受験の時に「誰もやってないことがしたい」と思っただけ、という単純なものでした。唯一ハンガリー語専攻を設置している旧大阪外国語大学で学び始めて半年もしないうちにハンガリーへ行くことにしました。初めての海外で、ましてや半年も勉強しておらず「右も左もわからない」状態でした。プログラムそのものは日本人グループと一緒にだったのですが、ハンガリー人の家族のところにホームステイしていたので「座って」

という単語すら聞き取れず、ホームシックになった記憶があります。しかしとても親切に優しく接してくれる家族、興味を持ってきてくれるハンガリー人の学生、ひょんなことから文通をすることになったkocsma(飲み屋)で知り合った男の子(そして5年以上になる今日も彼との文通は続いています)、おいしい料理、ブスタに広がる大自然、歴史を感じる建築物など、楽しい要素がいっぱいでハンガリーがとても好きになりました。2005年の2月にも同様のプログラムに再び参加するほどハンガリーがお気に入りになりました。連絡が取れる友達がいることがとても嬉しく思いました。

そうこうするうちに、ハンガリー政府奨学金の面接試験を受け、1年ハンガリーへ留学する決意をしました。私が選んだのはデブレツェンでした。2006年の9月、どこに何があるのかも全く分からない、知り合いもないデブレツェンでの生活が始まりました。到着当日から手配ミスにより居住場所が確保されていないというトラブルを発端に、問題続きの日々との戦いでした。3人相部屋、6人1ユニットの寮生活。もちろんルームメイトとの間にトラブルはたくさんありました。3ヶ月くらいひたすら忍耐しました。でもいつも必ず誰かが励まして

くれました。鞆をスーパーで盗まれた時も、見ず知らずのおばちゃんが旦那さんと一緒に警察に連れて行ってくれたり、寮まで奥手くれたり面倒をよく見てくれました。そして何よりも私のかけがえのない存在は、通っていたホルトバージ民族舞踊団です。年齢層の広いハンガリー人との週2回の練習が私のデブレツェンでの生活には欠かせない存在でした。色々なお祭りや舞台に連れて行ってくれたり、日本料理を作る会を開いてくれたり、するっと私を受け入れてくれました。ゆったり流れる時間、



心から笑える心の豊かさ、お客さん好きな民族が大好きです。ハンガリーでの生活は、ひたすら飲んで、踊って、飲んで、喋って、踊って、飲んで、喋りました。全くまじめな意見ではありませんが、ハンガリー人を知るためにはすごくいい手段です。

多くの人に支えられて過ごしたハンガリーでの10カ月を終えるころには「もうハンガリーに戻りたくない」と言っていた覚えがあります。楽しいことの反面、つらかったことも嫌だったこともたくさんあったからです。それから2年の間はハンガリーに行かずに、2009年3月に大学を卒業しました。気がつけば私は就職せずに再びハンガリーへ行く準備をしていました。自分の中で何か、違和感が残っていたからです。そうして2009年9月、私はまたハンガリーに降り立ちました。「何かを探すために」。

相変わらず問題だらけの日々ですし、1か月も使ってない自転車も盗まれましたし、ビザの取得にも6回以上入国管理局に通う始末でした。それでも、私の話に耳を傾けアドバイスをくれる友達がいること、各地に会いに行ける友達がいること、何気ない出会いが温かいことの幸せさに再度気づかされ「戻ってきてよかった」と思います。

良く言ったら大らかで寛容、悪く言ったら大雑把で適当なハンガリー人ですが、憎めない彼らとの生活の中でのびのびと暮らせる魅力を知ってしまった私が再びハンガリーに戻ってきたことは、強ち間違いではなかったでしょう。



6年間、そしてこれからも・・・

カルドシュ・ヨーゼフ、 オロス・ジュジャンナ

初めて日本語補習校について聞いたのは、大阪からハンガリーへ帰国した後の2003年夏で、知り合いが教えてくれました。娘たちは当時6歳半と4歳でしたが、日本の幼稚園で過ごした1年半のうちに日本語を習得し、二人で遊ぶ時には、しょっちゅう日本語になっているほどでした。長女は大阪の小学校に入学し、ひらがなと最初に習う漢字いくつかを既に勉強していました。

私たちは親として、「この知識を忘れさせてはならない。そしてこの言語能力を生かして、非常に豊かな日本の文化をもっと知る価値がある」と思いました。こうした中、補習校がブダペストにあると知ったときは、非常に嬉しく、すぐに入学手続きをとりました。この学校の明るい雰囲気、行き届いた運営、親切で熱心な先生方をとても素晴らしいと思っています。

この6年間、補習校のおかげで、長女は、日本的な環境の中で、

日本人の先生から、同年代の子供たちと一緒に日本語を学び、しゃべることができました。そのため、日本語を忘れないどころか、さらに能力を高めています。私 たちにとっては、語学の習得だけが大切なわけではありません。日本について多くの興味深いことを知ることができました。また、娘たちは、地理的には遙かな たにある文化も、知り得ることができ、受け入れ、そして好きになることが可能であるということ、極々当たり前のこととして捉えており、こうしたことは大 変貴重なことと考えています。

補習校のプログラムの中では、チッペールツで行った一泊の宿泊学習が、娘にとっては「金賞」に値する最も楽しいものだったということです。学校の仲間と一緒に料理をし、劇を演じ、夜は怪談話で盛り上がったそうです。

土曜日の4時間の授業の中で、現代の日本について学ぶことはとても興味深いことです。そして優しく親身な先生方には心から感謝しています。

### みどりの丘日本語補習校

11月21日にみどりの丘補習校チャリティーバザーが開催されました。保護者がもちよった、子供服、靴、本、DVD、おもちゃ、お菓子など、たくさんのが出品されました。そして、学校をあげてのチャリティーバザーに賛同していただいた業者の方、一般の方にも数組参加いただき、華やかなバザーとなりました。

今回、学校で力を入れたのは、クラフト製作です。来ていただく方々に、手作りの素敵なものを買っていただけたらと思い、数週間にわたり、子供たちが勉強している間、保護者があつまりました。クリスマスカード、しおりには、おりがみや和紙をつかって日本風に、ツリーの飾りの天使には、卵の殻を 上手に利用、というい

ろアイデアを持ち寄って、おしゃべりに花をさかせながら、たくさんのもので作成しました。そして多くの方々から買っていただきました!!とてもかわいらしいおりがみの飾りをつくって くれた 学年もあり、先生方の中にも手作りの小物を用意して下さった方もいらっしやって、学校全体が一丸となって、バザーにむけて準備をしました。その甲斐もあり、そしてたくさんの方々に来て下さったこともあり、大成功のバザーとなりました。



第2回目の開催でしたが、保護者、子供たち、先生方が一緒に、準備、開催に かかわり、 連帯感を増すことのできたバザーになったこともとてもうれしく思います。

### バドミントン部活動開始

10月よりバドミントン部が活動を開始しましたので、参加者を募集しています。

開催日程・場所は以下の通り:

<日時> 毎週日曜日の午後4時から2時間

<場所> 中学校体育館(ブダペスト2区、Kökény u. 44.)

毎回、約8~12人が集まり、練習で体を温めた後に試合を中心に楽しく活動しています。

バドミントンの経験がある方はもちろん、経験はないものの興味はあるという方、何か運動をしたいという方は以下までご連絡下さい。一緒に気持ちの良い汗を流しましょう!(お子様連れでの参加も問題ありません。)

連絡先:yusuke.tatebe@toyota.hu (建部)

### ゴルフ部

【月例会結果】

	優勝	2位	3位
7月19日	辻 (SEWS)	平松 (住友商事)	八代 (イビデン)
8月30日	成沢 (伊藤忠)	阿部 (大気社)	中山 (ソニー)
9月20日	坂梨 (丸紅)	大村 (ソニー)	宮崎 (日清食品)
10月18日	古川 (RYOWA)	植松 (イビデン)	栗原 (スタンレー)
11月8日	八代 (イビデン)	金廣 (ユーラシア)	陸川 (三井物産)

### 09年シーズンを終えて

この日本人ゴルフ部に参加させて頂き、早3年、今年は世話役として4カ国対抗戦副幹事、年間スコア係を担当致しました。対抗戦において、今年は王者奪還を胸に挑みましたが、想い届かず残念な結果となりました。ただウィーン往復のバスや前日決起会での楽しい思い出は忘れられません。来年はホーム!!スロバキア対策を十分に望みたいです。スコア係においては、全月例会のデータを纏める必要があり、全日程が終わった今、さぼっていた分をいそいそとデータ集計しておりました。全結果を見てみると、何と全9回の月例会で延べ参加人数264名、全大会出場者5名、1回当たりの平均参加者数30名と大いに盛り上がったコンペとなり、また個人的にも全大会出場、第8回月例会の優勝と充実した一年となりました。シーズンは終了しましたが、来年の更なる向上の為、これから防寒具を着用し、冬の特打ち修行を行います。(古川)

### 第11回「大吉杯」マッチプレー選手権(8月~10月、参加29選手)

優勝: 岡崎 (RYOWA) HCP.16

2位: 陸川 (三井物産) HCP.16

3位: 平松 (住友商事) HCP.7

### テニス部情報

#### お別れの挨拶

土曜テニスのメンバーの皆さん、ブダペスト駐在中の2年半、仲間に入れて頂き、一緒にテニスで汗を流すという時間を共有出来ましたこと、心よりお礼申し上げます。

私にとって、テニスをやる環境としては学生生活を相当前に終えてからは海外駐在が生活が一番充実していると実感しています。日本ではテニスクラブに所属するとか、会社のサークルに入るとか、しない限り、同じようなレベルの仲間を見つけ、毎週テニスに興じるというような環境を探すことはなかなか難しいのが現実です。以前ドイツに駐在した時も同様でしたが、ブダペストでは毎週土曜日の同じ時間に同じコートでテニスをやるという機会が得られ、生活の中にテニスを計画的に織り込むことが出来ます。人数も多いので、参加も強制されることなく、マイペースで体を動かす機会が得られます。

ブダペストでは単身生活であったこともあり、また日頃の運動不足とストレス解消を目的に積極的に参加させてもらいました。夏の間はゴルフとのかけもちで、体力勝負でもありましたが、日本ではこのような贅沢なチャンスはなかなか得られないと思います。2年半の間にメンバー数も増加し、コートも2面に増え、ちょっとハードにもなったとも感じていました。年齢とともに動きは鈍くなり、自分のイメージと異なるショットの連発でしたが、仲間の皆さんのお陰で2年半の間、私のテニスの老化は避けられたのではないかと秘かに思っております。皆さんの若さについていくのに精一杯でしたが、皆さんの若さの刺激を受けて気分的には駐在前より若返ったようにも思います。レギュラーメンバーの中では最年長者が帰国しますので、今後は更に若さあふれる、熱くハードなテニスが開催されるものと思います。「ちょっと、ひと休み」と号令をかけていた者がいなくなりますので、無理せず、楽しくをモットーに、そしてテニスのレベルアップを目指して、毎週のテニスを継続してください。

日曜テニスの皆さんとの交流も大変良い思い出になりました。交流会での試合は土曜の仲間とのゲームとはちょっと違った刺激で、夜の懇親会も含めて、駐在中の貴重な体験でした。

日本に戻るとテニスの機会は大幅に少なくなることは間違いありませんし、ハンガリーでのような刺激的なテニスからは遠くなくなってしまいますが、たまにはコートに行きテニスを忘れないように続けていきたいと思っています。

幹事の方には本当にお世話になり、お礼の言葉もありません。貴兄のお陰でメンバーも増え、参加率も高まり、土曜テニスは盛り上がっています。今後も更に盛り上がっていくことを日本から応援します。本当にありがとうございました。(的場)

### 釣り部

再興に向け部員を募集中です。入部希望の方は運動部まとめ役:飯尾まで一報ください。(e-mail: daikichi@mail.datanet.hu 又は Tel: 225-3965)

## ブダペスト日本人学校

### 家族をつなぐ一歩

西村 智美

昨年のナイキブダペストマラソンが、私達親子の初めてのレースでした。

運動不足解消と子供達に体力をつけたいと参加したものの、予想以上に体力のない我が子に啞然。

このままではいけないと、練習も私ばかり熱が入り、子供達の気持ちを聞く余裕はなかった。

その結果、大会途中、長女は走るのがつらいと、棄権してしまう。

距離が問題だったのではなく、娘達を励まし、一緒に頑張ろう！という

私の気持ちが欠けていた。母親失格だ。

レースの後には私の方が落ち込んだ。

その後のレースから私は、最後に走るわが子の背中につくことにした。

一人じゃない、一緒に頑張ろう！と。

今年のレースは、主人と5歳の娘も参加。

皆で完走。それが目標。決して止まらずに、自分のペースで走り切ろうと。

昨年挫折した長女は、友達と一緒に走り、私達家族の中で、最初にゴールした。

全員笑顔のゴール。家族と共に一歩前進できた気持ち。

次の一歩もまた娘達と一緒に頑張りたい。

\*\*\*\*\*

### ブダペスト日本人学校 新入生説明会のお知らせ

ブダペスト日本学校では、「平成22年度新入生説明会」を行います。説明会への参加、または入学を希望される方は、一度、下記アドレスまでメールをご送付ください。メールにて、詳細等をご連絡させていただきます。

何かお聞きしたいことがありましたら、お気軽に担当までご連絡ください。

日時: 平成22年1月23日(土) 10時~  
場所: 日本人学校2階ホール

問い合わせ: kajihara@bpjpschool.hu  
電話: +36-1-392-0360 担当: 梶原将司(教頭)

\*\*\*\*\*



## 日本人学校運動会

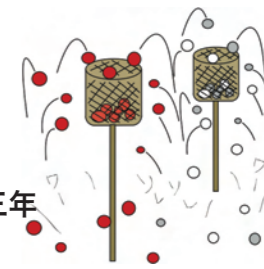


赤組団長 日本人学校中学部三年  
橋本 直樹

運動会の準備が始まり、団長を決める日、僕は迷っていました。しかし、自分がするしかないだろうと思い、思い切って手を挙げてみました。少し恥ずかしいという気持ちもありましたが、勇気を持って手を挙げることができました。

でも、九月になり、運動会の練習が本格的に動き始めても、やはり自分を取り残されていました。団長として何をすればいいのかかわからず、周りの人に頼ることしかできませんでした。だからこそ、僕は自分にできることを探し続け、考えた末に見つけたことは「やる気を見せる」ということでした。僕も、正直言うと、みんなが思っているように、練習はめんどくさくて、やりたくなくて、恥ずかしいという考えを持っていました。けれどぼくはそういう気持ちを出さないようにしました。練習が終わったあとの休み時間には、あまり人がいないところで「疲れたー!」と思いきり叫ぶこともありましたが、でも、どんなに足や体が疲れていても、練習が始まったら、やるぞと気持ちを入れ替えました。僕が前に立ち、堂々としていればみんなもついてきてくれると信じ、行動しました。みんなは爆発的な元気をもち、練習は何度も何度もできました。

そして、運動会当日、みんなはあの二週間を無駄にせず、観客に元気な踊りを見せつけ、本番は成功しました。僕にとってあれが成功したのは僕以外の応援リーダーのみんなのおかげだと思います。踊りや歌を夏休みに休日を削ってまで一生懸命考えてくれて、僕はみんなにとても感謝しています。彼らのおかげで赤組の応援が成功できたようなものです。そして、運動会終盤、あの接戦の末、赤組は十二点差で負けました。僕はあの十二点が忘れられません。「大玉で勝ってれば…。短距離走で一位をとってれば…。」と心の中で悔やんでも悔やみきれませんでした。



白組団長 日本人学校中学部三年  
久世 優美子

運動会の見せ場となる応援合戦の練習が始まったのは夏休みだった。午後を三日間フルに活用し、短期間に集中して土台を作り上げた。夏休みが明け、一週間、二週間と順調すぎるくらい練習は円滑に進んだ。その頃は、全体の動きを覚えて、それを教えることだけで精一杯だった。しかし、残り一週間となり、練習もまとめに入るころ「楽しむ」という言葉を聞いたのをきっかけに、自分がどんな応援にしたいかを考え始めるようになった。そのとき聞いた「楽しむ」という言葉には初めて耳にするかのような新鮮な響きがあった。心にしみる清らかな響きがあった。そんな言葉に巡り会えた。

それからは「楽しむ」というのが白組の応援のコンセプトになった。私は応援リーダーとして運動会を楽しむにはどうすればいいか深く考えた。それはもう、夢に出てくるくらいまで。しかし、どんなに頭で考えても、応援合戦の楽しみ方に明確な答えは出てこなかった。ただ、団長としてみんなにしてあげられることは、みんなを楽しませてあげることなのだ気づくことはできた。

この運動会、間違いや失敗など、やり直したいこともいろいろあったけど、小学生の応援している声や、ハイタッチしたときの手の感触などの方が強く心に焼き付いている。そんな楽しい運動会にできたのは、練習から本番まで力を合わせて一緒に盛り上がった白組の仲間、最後まで精一杯競った赤組、何ヶ月も前から私たちの知らないところで運動会を支えてくださった日本人会の方や先生方がいてくれたからだと、振り返って改めて思う。この感謝の気持ちは言葉では言い尽くせないけど、ちゃんと言葉にして伝えたい。

ありがとう。

Japan Coop Kft.: 1025 Bp,Cimbalom u. 7.

Tel.:345-0450 Fax: 345-0008

e-mail: paprika-tsushin@jpc.hu

ホームページ: www.paprika-tsushin.hu/

登録は無料ですのでE-Mailにてお申し込みください。



### 編集部よりのお知らせ

・秋季号の15頁目の西村知美さんの寄稿、ならびに17頁目の久世優美子さんの寄稿の編集に不手際がありましたので、この再掲いたします。

・「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。http://www.danube4seasons.com

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。



原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書をお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。



インターネットで人生の楽しさを広げましょう! オトナももっと遊ぶ時代

# 人生に夢と輝きを BYOOL SNS ~The Best Years Of Our Lives~

**BYOOL SNS** (Social Networking Service)は、大人が楽しめるユーザー参加型のWEBサイトです。スマートな大人が集まるグローバルな知的空間を目指しています。現在、10ヶ国の海外に住む日本人が参加しており、国を超えて、文化や政治・経済始め、幅広い分野において、情報発信、議論を行なっています。あなたの知的好奇心を満たしてみませんか?

★参加方法：事務局まで参加希望の旨、メールをお願いします。招待メールをお送りします。

BYOOL事務局 Email: [admin@byool.com](mailto:admin@byool.com) 「BYOOL Bloggers」 <http://www.byool.com>

★お問い合わせ：上記事務局アドレスまでお問い合わせください。

## 日記・エッセイ



自分のページを持てる。  
日記、エッセイ、ブログ、  
記録として。

## コミュニティ



同じ興味・関心を持つ  
仲間の交流の場。  
OB/OG会にも。

## 豊かさ・輝き



様々な人の意見・情報のシェア、  
そこから生まれる新しい  
発見や気づきが、  
人生を豊かに輝きあるものに。

## 安心・安全



無料会員制。  
SNSのメンバーだけが利用  
できるクローズドなサービス  
なので、安心安全。

書き込みはすべて非公開にできますので、スケジュール管理や、何か自分の記録をつけたり、コミュニティをグループの連絡用に使用していらっしゃるメンバーもいます。

## BYOOL Selection

BYOOLでは、品質にこだわり抜いた無農薬・有機栽培の緑茶知覧茶・有機緑茶と、コクのある味わいの知覧茶・深むし茶を皆様にご紹介しております。

国内でも有数のお茶の産地として知られる鹿児島県知覧町の、全国茶品評会などのコンクールで、上位入賞経験を持つお茶園から、直接取り寄せました。環境に優しく、そして、人に優しいお茶で、心落ち着かず優雅なひとときをお過ごしください。 **BYOOL Selection:** <http://byool.open365.jp/>

## さくら DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等  
名刺1枚からご希望の言語にて  
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、  
内装工事、翻訳から印刷まで  
幅広く受け承っております。  
お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: [info@innerdesign.hu](mailto:info@innerdesign.hu)  
Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.  
Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

[www.innerdesign.hu](http://www.innerdesign.hu)

## Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを  
中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグ  
ローバルな企画・マネージメント展開を行って  
います。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、  
各楽器講師紹介なども随時承っております。

### Propart Hungary Bt.

Address: 1089 Budapest, Kóris utca 25. II/6  
Tel&Fax: +36-1-786-7846  
Mobil: +36-70-3815548  
e-mail: [propart@chello.hu](mailto:propart@chello.hu)  
web: <http://propart.client.jp/>

Propart